

ショパン作曲《演奏会用アレグロ》にみる  
ピアノ協奏曲的要素と協奏曲第3番の可能性  
Uncompleted Chopin's Piano Concerto  
No.3 and *Allegro de Concert Op.46*

佐藤 友衣<sup>1</sup>・松井 裕樹<sup>2</sup>・安江 真由美<sup>3</sup>・松永 洋介<sup>4</sup>

Tomoe SATO, Hiroki MATSUI, Mayumi YASUE and Yosuke MATSUNAGA

## 1. はじめに

フレデリック・ショパン（フランス語：Frédéric François Chopin、ポーランド語：Fryderyk Franciszek Chopin）は1829年から1830年にかけて2つのピアノ協奏曲を作曲した。前期ロマン派にあたるこの時代には、メンデルスゾーン、フンメル、フィールドなどの作曲家がショパンと同じ古典的な協奏曲風のソナタ形式によって協奏曲を作曲している。この形式を持った協奏曲のほとんどは、これまでに忘れられたものが多いが、ショパンのピアノ協奏曲は長きにわたって多くの音楽家、特にピアニストから愛されている作品である。この2つの協奏曲は、華麗なフィギュレーション、随所に見られる美しさ、そしてショパン特有の優雅で流れるようなメロディーが魅力でありショパンの傑作として知られている。《ピアノ協奏曲第1番》、《第2番》<sup>5</sup>の作曲を成功させたショパンは、第3のピアノ協奏曲を作曲しようとしていたのである。それは大変に興味深い事である。しかしながら、ショパンは3つ目のピアノ協奏曲を完成させることはなかった。小坂やサムスンらの資料<sup>6</sup>から、3つ目のピアノ協奏曲になる予定であった曲は、現在《演奏会用アレグロ作品46(Allegro de Concert Op.46)》として存在していることがわかった。

なぜショパンピアノ協奏曲第3番は世に出ることがなかったのか。本論文では、ショパンの構想が《演奏会用アレグロ作品46》として作曲された経緯、及び協奏曲第3番が未完成となった要因を明らかにすることを目的とする。

そのため、ショパンがピアノ協奏曲第3番の作曲を試みたことがわかる根拠を《演奏会用アレグロ作品46》に求め、楽曲分析を行った。そして、そこに内包される協奏曲的な要素を検証した。

## 2 ピアノ協奏曲第3番の起源

ピアノ協奏曲第3番の存在が初めて確認されるのは1830年12月22日である。それは、ショパンがウィーンから家族宛に送った手紙の中で、ショパンは「新しい協奏曲（第3番）のアイデアがあること、そしてその協奏曲が完成したらショパンの友人であるニデツキと初演を希望していること」<sup>7</sup>の2点について言及していることによる。

次にピアノ協奏曲第3番が確認されるのは1834年である。それまでショパンは新しい協奏曲について何も触れていない。すなわち1830年～1834年の間、この曲の作曲が進められていたかどうかは不明である。1834年、ショパンの父ニコラスが手紙の中でショパンに、「ピアノ協奏曲第3番は完成

<sup>1</sup> 愛知学泉大学家政学部家政学科こどもの生活専攻非常勤講師

<sup>2</sup> 岐阜大学教育学部音楽教育講座非常勤講師

<sup>3</sup> 愛知学泉大学家政学部家政学科こどもの生活専攻

<sup>4</sup> 岐阜大学教育学部音楽教育講座

<sup>5</sup> 《ピアノ協奏曲第2番》は《第1番》より先に作曲されている。作曲年は、《第2番》が1829～1830年、《第1番》は1830年である。曲番号は出版された順による。

<sup>6</sup> 小坂裕子（2010）『フレデリック・ショパン全仕事』株式会社アルテスパブリッシング、p.170

ジム・サムスン（大久保賢訳）（2012）『ショパン孤高の創造者 人・作品・イメージ』株式会社春秋社、p.128, p.291

Mieczysław Tomaszewski <http://en.chopin.nifc.pl/chopin/composition/detail/page/6/id/109> (2018.1.1 アクセス確認)

<sup>7</sup> Hedley, Arthur. Selected Correspondence of Fryderyk Chopin. (English edition) Da Capo Press, INC. 1963 p.71

したか」<sup>8</sup>と尋ねている。そして1835年4月、父ニコラスは前年と同じ質問をショパンに対してしているが、ショパンはそれについて何も返答をしていない<sup>9</sup>。

一方ショパンに大変気に入られた弟子の1人であるフレデリック・ミュラーは、手紙の中で「ショパンは新しいピアノ協奏曲を書き、私に献呈すると約束をしてくれている」<sup>10</sup>と述べている。

このことからショパンが第3番を構想していたことは明らかである。しかし、父ニコラスの問いに返答をしていないことから、作曲途中で何らかの理由により作曲を中断した、もしくは断念した可能性がうかがえる。その理由を《演奏会用アレグロ作品46》の性格から考察していく。

### 3. ピアノ協奏曲第3番と《演奏会用アレグロ作品46》の関連性

ショパンは第3のピアノ協奏曲を作曲しようとした後、協奏曲としてではなくピアノ独奏曲《演奏会用アレグロ作品46》として出版した。ここでは協奏曲からピアノ独奏曲へと曲の形態が変更されたとわかるいくつかの根拠を挙げていく。

例えばショパンがライプツィヒの出版社ブライトコップフ・ウント・ヘルテルに向けた手紙の中では、「第3の協奏曲をピアノ独奏のためのアレグロ・マエストロ（ピアノ協奏曲第3番）《*Allegro maestoso (du 3me Concerto) pour piano seul*》として出版する」<sup>11</sup>ことを提唱している。

さらに、ショパンの友人であるフォンタナに宛てた手紙には、「サンドの息子が私の協奏曲の手稿を持って行くだろう」<sup>12</sup>と記されている。これらの書簡は、ピアノ協奏曲第3番のルーツと、結果的にその作品が《作品46》として作曲されたことを明らかにしている。

#### 3-1. 《演奏会用アレグロ》

《演奏会用アレグロ(Allegro de Concert Op.46)》は1841年11月に出版され、弟子のフリーデリケ・ミュラーに献呈された。ここで再確認しておくが、ピアノ協奏曲第3番は《作品46》の前にも後にも出版されていない。そしてこの作品の形式は他2つのピアノ協奏曲の第1楽章に類似している。また、この作品の作曲中にショパンはフランツ・リストと知り合っている。技術的側面から見ると、本作品は跳躍、オクターブの連続といった難しい技術が含まれているが、それは超絶技巧で有名なリストの影響をうけていることが推察される。

次に《演奏会用アレグロ作品46》の性格を理解するためにこの作品を概観する。

《演奏会用アレグロ作品46》は、Allegro Maestoso（快速に、荘厳に）、4分の4拍子、ソナタ形式である。40小節間続く長い序奏はイ長調で始まる。付点のリズムが左右のユニゾンで書かれており、荘厳さが表現されている（譜例1-1）。またミェチスワフ・トマシェフスキは、「そのメロディーからショパンがポーランドに対して抱いていた愛国心も感じられる」<sup>13</sup>と述べている。途中トニックの和音が何度か現れるが、調性の変化とともに展開され、第1主題が現れるまで完全な解決は見られない。そして提示部には2つの主題が登場する。第1主題（譜例1-2）が現れたあと、続いて第2主題はノクターンのようなメロディーが美しい装飾とともに歌われる。ここで使われている3連符が、序奏で扱われている付点のリズムで表現される荘厳さに対し、流麗さを出している（譜例1-3）。展開部では、第1主題が属調であるホ長調で書かれている（譜例1-4）。提示部と比較して左の音型は1つに統一されていることから、もしこの作品がピアノ協奏曲であった場合、この部分はピアノ独奏であったこと

<sup>8</sup> Hedley, Arthur. (1963) 前掲書、p.122

<sup>9</sup> 同上書、p.126

<sup>10</sup> Rink, John. (1997) 前掲書、p.90

<sup>11</sup> 同上書、p.91

<sup>12</sup> アーサー・ヘドレイ（小松雄一郎訳）（1965）『ショパンの手紙』株式会社白水社、p.289

<sup>13</sup> Mieczysław Tomaszewski <http://en.chopin.nifc.pl/chopin/composition/detail/page/6/id/109> (2018.1.1 アクセス確認)

が想像できる。再現部では提示部の同主短調であるイ短調で始まり（譜例 1-5）、主調のイ長調へと回歸する。第1主題にさらに装飾が加えられ、メロディーが一層華やかになっている。第2主題は省かれて、3連符の即興的なパッセージとともに調性は色彩豊かに移り変わる（譜例 1-6）。そして最後のコーダでは音域が広く使われ、オクターブの3連符は壮大さと華やかさを表現し幕を閉じる（譜例 1-7）。

【譜例 1-1： 《演奏会用アレグロ作品 46》 第1～4小節】

**Allegro maestoso.**

【譜例 1-2： 《演奏会用アレグロ作品 46》 第41～44小節】

【譜例 1-3： 《演奏会用アレグロ作品 46》 第91～92小節】

*a tempo*

【譜例 1-4： 《演奏会用アレグロ作品 46》 第125～128小節】

*a tempo*

*sostenuto*

*p dolce*

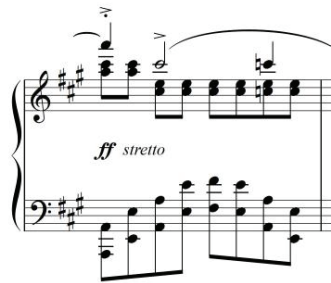
【譜例 1-5： 《演奏会用アレグロ作品 46》 第201～204小節】



【譜例 1-6： 《演奏会用アレグロ作品 46》 第 229 小節～231 小節、第 269 小節】



【譜例 1-7： 《演奏会用アレグロ作品 46》 第 269 小節】



#### 4. 《作品 46》を書いた頃のショパンの生活

第 2 章で述べたように、ショパンが新しいピアノ協奏曲の着想を得たことを父に打ち明けたのは 1830 年 12 月であり、その後この曲がピアノ独奏曲として出版されたのは 1841 年である。構想が浮かんでから出版するまで約 11 年もの期間があるが、その間作曲の作業を常に行っていたかはわからない。そこで 1830 年から 1841 年までの 11 年間のショパンの生活や作曲の様子の情報(表 1)をみることで、本作品の作曲の状況を考察する。

【表 1：年別のショパンの様子 (1830 年～1841 年)】

年	できごと、音楽活動、健康状態	ポーランドと家族の様子	ショパンの滞在場所
1830	デビューコンサート(ワルシャワ)、ポーランドを出国	11 月 ワルシャワ蜂起	ポーランド→ウィーン
1831	シューマンが作品 2 の評論をショパンに送る ウィーンからパリへ移動する	ポーランドの敗北とロシアによる占領を知る	ウィーン→パリ
1832	デビューコンサート(パリ・プレイエルホール) 社交界で活躍する、メンデルスゾーンやリストに会う		パリ
1833	リストとコンサートで共演 《ピアノ協奏曲第 1 番》を出版		パリ

1834	ライン音楽祭にて演奏をする ベルリオーズやヒラーと演奏会に出演	妹イザベラが結婚	パリ、ドイツ
1835	演奏会開催（パリ音楽院） マリア・ヴォジンスカに会い心惹かれる、体調を崩す	両親とチェコのカールスバードで会う	パリ→チェコ→ドレスデン→ライプツィヒ→ハイデルベルク→パリ
1836	マリアに求婚する ジョルジュ・サンドに会う	ショパンの病気を家族が心配する	パリ、ライプツィヒ
1837	インフルエンザにかかり体調を崩す マリアとの婚約解消		パリ、ロンドン、ノアン
1838	サンドと親しくなる 結核が悪化する		パリ、ペルピニャン、マヨルカ、バルデモサ
1839	前奏曲作品 24》 やスケルツォ第 3 番》などの傑作を作曲 体調が快方に向かう		マヨルカ島→バルセロナ→マルセイユ→ノアン→パリ
1840	パリでジョルジュ・サンドと過ごす		パリ
1841	演奏会（プレイエルホール） 《演奏会用アレグロ》出版		パリ、ノアン

この年表をみると、ショパンがピアノ協奏曲第3番の構想を始めた1830年から数年間、母国ポーランドで歴史的な動きがあったことがわかる。ポーランドを出たショパンは祖国を大変愛していたためその知らせを聞き落ち込んだことが推測できる。またショパンの音楽はウィーンでは良い評価を受けることができず、異郷の地での滞在はうまくいかなかった。

1831年、ショパンはウィーンを出てパリへ向かった。パリでの生活当初は経済的に苦しんだが、のちに貴族にピアノを教える機会を得て、さらにサロンでの活躍もあり経済苦からは脱した。その一方で、家族のことが心配であったため母国ポーランドへ戻ることを切望していたが、その想いは実現することが難しく、それによって生み出されたもどかしさに苦しんだ。

1832年ショパンは、パリのプレイエルホールにてデビューコンサートを行い、同年ショパンは、リストやメンデルスゾーンらと出会った。そして翌年の1833年にはリストとコンサートで共演している。第2章で1830年から34年までの間、作曲が進んでいたかわからないと述べたが、《作品46》はリストの影響を受けていることから1832年から1833年は作曲が継続されていたことが推測できる。

1835年以降は、結核を患い体調を崩すことが多くなった。1835年、両親とカールスバートにて再会し3週間滞在する。これが両親との最後の面会となる。カールスバートからパリへ戻る途中に訪れたドレスデンでマリア・ヴォジンスカに出会い心惹かれる。しかしショパンの不安定な体調が懸念材料となりマリアとの結婚には至らなかった。その後ジョルジュ・サンドと親交を深める。そして1841年には《演奏会用アレグロ作品46》が出版された。

ショパンの当時の様子についてたどってみると1832年～1833年には作曲が継続されていたことを推測できた。しかし、1834年以降の作曲状況と作曲を断念した理由についての明確な情報は得られなかった。次の章では、2つのピアノ協奏曲以外に作曲された管弦楽とピアノのための作品の作曲、出版時期そして、ショパンのオーケストレーションについてみることで完成されなかった理由を探る。

### 5. ショパンの作風／オーケストレーション

ショパンはピアノの詩人と呼ばれるようにほとんどの作品はピアノのためのものである。管弦楽のためだけに書かれた作品はない。しかしショパンにもピアノと管弦楽のための作品は存在する。

ショパンのオーケストレーションの不得意さについてしばしば批判されることがある。また、ヤン・エキエルは《ピアノ協奏曲第2番》について、「半自筆譜」<sup>14</sup>と解説しており、ショパンが管弦楽部分を1人で手掛けたかどうかは定かではないと考えていたことが読み取れる。しかし一概にショパンのオーケストレーションの不得意さが協奏曲第3番の作曲を断念した理由とは言い切ることができない。この章では、管弦楽とピアノのための作品を検証することで、ピアノ協奏曲第3番が完成されなかった理由を探る。

この頃のピアノ協奏曲はどのようなスタイルが主流だったのか。ショパンはカルクブレンナー、フィールド、フンメルといった作曲家の、ピアノが華麗に奏で、オーケストラはあくまで伴奏であり引き立て役であるという作風を手本にしていた。小坂はショパンのオーケストレーションについて「ショパンのピアノ協奏曲はオーケストラの扱いが物足りない」と批判されることがあるが、オーケストラの楽器に精通していなかったからではなく、時代がそのような作品を求めていたからだ考えると、納得がいく<sup>15</sup>と述べている。

また青澤は「ショパンにとってさまざまな楽器を扱うオーケストラパートを書くことはひどく面倒な気の重い作業であった」<sup>16</sup>と指摘し、小坂は「オーケストラとの合わせがストレスであること、演奏するには大きなホールの舞台に出向かなくてはならないことなど、ショパンには重荷に感じるものばかりだ」<sup>17</sup>と述べている。実際にショパンは、ウィーン滞在時にオーケストラとのトラブルを経験しており、アーサー・ヘドリーは「オーケストラとの関係に苦悩し、それが原因で第3曲目となるピアノ協奏曲の作曲を断念したのかもしれない」<sup>18</sup>と推察している。前述したショパンの年表と照らし合わせてみると、1835年頃以降体調を崩すことが多くなったことから、オーケストラとの合わせや演奏場所の選定などを考えなくてもよいピアノ独奏曲の作曲に集中するというのは納得できる。また、ショパンにとってピアノという楽器が特別であり、ピアノで様々な楽器の魅力を表現できる技術があったこともピアノ独奏曲作曲への集中に関係していると考えられる。

#### 5-1. ピアノ協奏曲作品について

【表2：ショパンのピアノと管弦楽のための作品一覧】年齢は作曲時

	表題	作品番号	作曲	年齢	出版	初演
ポーランド時代	『ドン・ジョバンニ』の<ラ・チ・ダレム・ラ・マーノ>の主題による変奏曲	作品2	1827~28	17~18	1830	1829(ウィーン)
	ポーランド民謡の主題による幻想曲	作品13	1829	19	1834	1830(ワルシャワ)
	演奏会用ロンド『クラコヴィアク』	作品14	1828	18	1834	1829(ウィーン)
	ピアノ協奏曲第2番	作品21	1829~30	19~20	1836	1830(ワルシャワ)
	ピアノ協奏曲第1番	作品11	1830	20	1833	1830(ワルシャワ)
ポーランド/バリ時代	アンダンテ・スピナートと華麗なる大ポロネーズ	作品22	1830~35	20~25	1836	1835(パリ)

表2からほとんどの作品がポーランドにいた時代（10代後半から20代前半頃）に作曲されていることがわかる。初めてピアノと管弦楽のための作品を書いたのは17歳のときで、『『ドン・ジョバンニ』の<ラ・チ・ダレム・ラ・マーノ>の主題による変奏曲作品2』はロベルト・シューマンにより賞賛されたことで有名である。そのシューマンは、『演奏会用アレグロ作品46』に対して、「作品46

<sup>14</sup> 青澤唯夫 (2012) 『ショパンその全作品』芸術現代社、p.47

<sup>15</sup> 小坂裕子 (2010) 前掲書、p.50

<sup>16</sup> 青澤唯夫 (2012) 前掲書、p.33

<sup>17</sup> 小坂裕子 (2010) 前掲書、pp.170-171

<sup>18</sup> Hedley, Arthur. *Chopin The Master Musician Series*. J. M. Dent and Sons LTD. 1947、p.140

は始めオーケストラとピアノが演奏する曲として書かれたのだろう。協奏曲の第1楽章の形式を完全に備えている。華麗なパッセージはあるものの、cantabileなメロディーに欠ける<sup>19</sup>と指摘している。このシューマンによる批評は、本作品がピアノ協奏曲であった可能性を示唆する重要な資料である。

ショパンが19～20歳のときに作曲した《ピアノ協奏曲第1番、第2番》の初演はワルシャワで行われており大成功を収めた。その評価はショパンのピアノ協奏曲第3番作曲への意欲に関係したと考えられる。この中で最後に作曲された協奏曲は《アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ》であり、ショパンが20～25歳のときに作曲された。この作品は、独奏曲版もあり現在は協奏曲版よりも演奏機会が多い。作曲年をみると、この作品のみポーランド、パリ両時代に渡って作曲されていることがわかる。実際は《華麗なる大ポロネーズ》はポーランド時代に書かれ、《アンダンテ・スピアナート》はパリ滞在時に作曲され付け加えられている。作曲に計5年という時間をかけていることについて小坂は「故郷を出てウィーン、そしてパリに向かうという大きな生活環境の変化が作曲を中断させたのであろう。パリで落ち着いた頃、ポーランドや恩師の期待を思い出したのかもしれない<sup>20</sup>と述べている。

ピアノ協奏曲第3番の作曲が中断された理由は、《アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ》の作曲背景と同様、生活環境の変化が関係していると推察することができる。

### 5-2. 《演奏会用アレグロ作品46》と《ピアノ協奏曲第1、2番》との相違点

3-1で《作品46》がピアノ協奏曲の第1楽章の形式と類似していると述べたが、この章ではショパンの2つのピアノ協奏曲の第1楽章と《作品46》を比較する。

#### (1) 《ピアノ協奏曲第1番》 第1楽章

アレグロ・マエストーソ ホ短調 4分の3拍子。管弦楽による第1主題(T1)で始まり、第2主題(T2)が主調の同主調であるホ長調で現われる。そのあと独奏ピアノが第1主題をホ短調で、第2主題を管弦楽と同じホ長調で演奏する。管弦楽のコデッタ(Cdt)から展開部へと続く。展開部は、主調の6度調であるハ長調でピアノが登場し、再現部は管弦楽からピアノへと受け渡される。そして主調であるホ短調のコーダで幕を閉じる(図1-1)。

#### 【図1-1: 《ピアノ協奏曲第1番》 第1楽章】

<提示部>

Orch.				Pf.												
T1a	T1b	推	T2	推	Cdt	T1a	T1b	推	T2	推	NM	Cdt				
1	25	39	54	61	91	123	139	155	179	222	252	275	282	298	333	384
ホ短調				ホ長調				ホ短調				ホ長調				

<展開部>

				Orch.				Pf.							
①	②	③	推	T1a	T1b	推	T2	Cdt	Coda						
385	408	448	472	485	509	533	572	601	621	689					
ハ長調		イ短調		ホ短調				ト長調				ホ短調			

T1=第1主題 T2=第2主題 推=推移部 Cdt=コデッタ NM=新しいモチーフ

#### (2) 《ピアノ協奏曲第2番》 第1楽章

マエストーソ ヘ短調 4分の4拍子。《ピアノ協奏曲第1番》と同様に管弦楽による第1主題、第

<sup>19</sup> Rink, John. (1997) 前掲書、p.92

<sup>20</sup> 小坂裕子 (2010) 前掲書、p.83

2 主題で始まり、ピアノが登場する。管弦楽と同じへ短調から変イ長調へと移り変わり、展開部へと続く。展開部では第1主題を中心としたモチーフが現れる。再現部は第1主題が断片的に使用され、第2主題を中心に扱われている。提示部でも登場した新しいモチーフがピアノと管弦楽の掛け合いで演奏され、ピアノと管弦楽によるコーダで締めくくる。調性は主調と平行調を軸とした動きが見られる(図1-2)。

【図1-2:《ピアノ協奏曲第2番》第1楽章】

<提示部>

Orch.			Pf.								
T1	推	T2	推	Intro	T1	推	T2	NM1	NM2	Cdt	
1	9	37	59	71	74	105	125	151	161	181	204
へ短調			変イ長調		へ短調			変イ長調		へ短調	

<展開部>

<再現部>

Pf.			Orch.							
①	②	③	(T1) → T2	推	NM1	NM2	Cdt	Coda		
205	225	257	269	273	291	301	311	319	337	348
変イ長調			へ短調		変イ長調		へ短調			

(3) 《ピアノ協奏曲第1番、第2番》との比較

《演奏会用アレグロ作品46》を分析したものが図1-3である。

【図1-3:《演奏会用アレグロ作品46》】

<提示部>

<展開部>

<再現部>

Intro	T1	Cdt?	T2	推?	①	②	推	Coda?	T1	推	Cdt	Coda		
1	40	65	84	90	110	124	141	151	181	183	201	229	269	280
イ長調	変ロ長調		イ長調	ホ長調(嬰ハ短調)			ホ長調	イ短調		嬰へ短調	イ長調			

2つのピアノ協奏曲と《演奏会用アレグロ作品46》を比較してみると、類似点はマエストーソであること、自由なソナタ形式で作られていること、長い序奏部をもつこと、及び2つの主題をもつこと、以上4点である。《演奏会用アレグロ作品46》の調性の動きは主に平行調と属調が扱われており、《協奏曲第2番》の調性の動きと共通していることが認められる。また、《協奏曲第2番》の再現部においては第1主題が完結されないまま第2主題に移行している。《作品46》の再現部では第2主題は扱われていない。2つの主題のうちどちらかの主題が扱われていない点は類似点だと言えるのではないか。一方、相違点は2つの協奏曲が短調であるのに対して《作品46》は長調で書かれているところである。

《協奏曲第1番、第2番》は、ともに管弦楽による第1主題・第2主題が現れたのちピアノが登場する。それに対して、《演奏会用アレグロ作品46》は、序奏のあと第1主題が現われたあと、コデッタ風の楽想に続き、推移部のような楽想で締めくくる。通常は、第2主題の前に推移部があり、提示部はコデッタにより締めくくられる。

以上のことから《演奏会用アレグロ作品46》と《ピアノ協奏曲第1番、第2番》には①マエストーソであること②自由な協奏曲ソナタ形式でつくられていること③2つの主題(Op.11 ホ短調とト長調/Op.21 へ短調と変イ長調/Op.46 イ長調とイ長調)をもつこと④長い序奏部をもつこと(41小節間)という類似点が4点あることがわかったが、2つの主題の調性については、類似点が見られなかった。そして、前述したシューマンの批評からは、ショパンが初めはピアノ協奏曲として作曲に取りかかり、ピアノ独奏による協奏曲のような作品を作ろうとしたことがうかがえる。



## 6. 《作品46》の編曲例

ショパンはピアノ独奏用の作品として《作品46》を出版したが、のちに他の作曲家によって管弦楽とピアノのために編曲されたものが存在する。この章ではジャン・ルイ・ニコデ（1853-1919）の編曲例を抜粋で紹介する（譜例[2-1][2-2]）。

【譜例 2-1： ニコデ編曲《演奏会用アレグロ作品46》 第1～3小節】  
序奏（管楽器パート） 序奏（弦楽器パート）

【譜例 2-2： ニコデ編曲《演奏会用アレグロ作品46》 第1～4小節】第1主題

ピアノ独奏用の作品、《演奏会用アレグロ作品46》が管弦楽とピアノのために編曲されたのは、もともとショパンがピアノ協奏曲第3番の作曲に取りかかった事実があるからだと考えられる。編曲版の楽譜や音源からは、原曲で登場する複数のモチーフの掛け合いがオーケストラとピアノにうまく振り分けられ、ピアノソロの部分ではピアノの魅力が感じられる。しかし、原曲には独奏曲でありながら管弦楽作品特有の壮大さに並ぶ魅力がある。それはショパンがピアノ独奏曲にピアノ協奏曲的な要素を詰め込むことで、ピアノの演奏効果を出すことを狙った可能性があるためだと考えられる。

## 7. まとめ

フレデリック・ショパンが第3のピアノ協奏曲を作曲しようとしていたことは、家族や友人宛の書簡そしてシューマンの本作品に対する批評から明らかになった。しかしその作品は完成されることはなく、ピアノ独奏曲《演奏会用アレグロ作品46》として遺された。そしてこの曲が第3番となる可能性も見つけることができた。ピアノ協奏曲第3番の作曲が断念されたのは、ウィーン滞在時に経験したオーケストラとのトラブル、パリでの困難、家族や祖国に対する懸念などの経済的、精神的要因等が理由ではないかと推測する。そこにはショパンがピアノ作品の作曲を通して自分らしさを追及できると考えたこともうかがえる。

ショパン直筆の手紙は2011年に新たに6通見つかっている。そこには家族や友人に向けて当時の様子や作品にかかる想いが記されている。そのため今後書簡を含む新たなピアノ協奏曲第3番に関する資料が発見された場合、ショパンがピアノ協奏曲第3番の作曲を断念した理由がいつそう明らかになる可能性がある。したがって本件における継続的探究を今後の課題としたい。

注 この研究は佐藤が米国マネス音楽院修士課程在学時に提出した「Introduction to Graduate Studies」での最終レポートを、佐藤、松井、安江、松永が再検討したものである。

参考文献

洋書

- Hedley, Arthur. Chopin The Master Musician Series. J. M. Dent and Sons LTD. 1947  
Hedley, Arthur. Selected Correspondence of Fryderyk Chopin. (English edition) Da Capo Press, INC. 1963  
Huneker, James. Chopin, The Man and His Music. Dover Publications, INC. 1996  
Rink, John. Chopin The Piano Concert, Cambridge Music Handbooks. Cambridge University Press. 1997

和書

- 青澤唯夫 (2012) 『ショパンその全作品』 芸術現代社  
小坂裕子 (2010) 『フレデリック・ショパン全仕事』 株式会社アルテスパブリッシング  
小坂裕子 (2016) 『作曲家◎人と作品 ショパン』 株式会社音楽之友社  
ジム・サムスン (大久保賢訳) (2012) 『ショパン孤高の創造者 人・作品・イメージ』  
株式会社春秋社  
野村光一、寺西基之 (1993) 『作曲家別名曲解説ライブラリー ショパン』 株式会社音楽之友社  
楽譜  
Chopin, Fryderyk (Redaktor naczelny: Jan Ekier)(2017) Wydanie Narodowe 『DZIEŁA RÓŻNE  
(A) Seria A. Utwory wydane za życia Chopina. Tom XII.』 Fundacja Wydania Narodowego  
Polskie Wydawnictwo Muzyczne  
Chopin, Frederic/ Jean Louis Nicode (2010) 『Concert-Allegro: Op. 46 (1880) (German Edition) 』  
Kessinger Publishing, LLC  
ショパン (2011) 『パデレフスキ編ショパン全集 XIII 演奏会用アレグロ 変奏曲』  
株式会社アーツ出版  
フレデリック・ショパン (2005) 『ショパン ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調』 全音楽譜出版社  
フレデリック・ショパン (2005) 『ショパン ピアノ協奏曲 第1番 ホ短調』 全音楽譜出版社  
オンライン資料  
Dawes, Frank. The Musical Times, Vol. 115, 1974 <http://www.jstor.org/stable/957698>.  
(2017.12.22アクセス確認)  
Chopin's First Edition Online. <http://www.chopinonline.ac.uk/cfeo/browse/pageview/66003/>  
<http://www.chopinonline.ac.uk/cfeo/browse/pageview/65979/> Publication History (2017.12.22  
アクセス確認)  
Mieczysław Tomaszewski. Fryderyk Chopin Institute  
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/composition/detail/page/6/id/109> (2017.12.22アクセス確認)

音源資料

- Fleming, Shirley. The Romantic Piano Concerto, Volume 1. CDX 5064. ESSE Entertainment, INC Michel Ponti, Piano, Recorded in 1978 by Heinz, Sudwest Ton Studio, Stuttgart. TMK (S) R Vox Box